

A WAY OF LIFE

Alfons Deeken



日本で「死生学」という学問を根づかせたカトリック神父がいる。その人の名は、アルフォンス・デーケンさん。

妹の死や戦争によって遭遇した過酷な試練を経て、信仰に生きることを決めたアルフォンス青年は、長じて日本に赴き、「死の哲学」をはじめ「死への準備教育」、「悲嘆ケア」、あるいはターミナルケア終末期医療やホスピスをテーマにして、さまざまな教育、周知活動に携わってきた。誰もが避けられない「死」に対して、デーケンさんはどのように向き合っているのだろうか。

デーケン先生、
死生学について
教えてください

アルフォンス・デーケンさん

1932年、ドイツ生まれ。ニューヨークのフォードム大学大学院で哲学博士号を取得。1959年来日し、上智大学で「人間学」、「死の哲学」、「西洋倫理思想史」講義を担当した。1975年アメリカ文学賞(倫理部門)をはじめ、1991年度全米死生学財団賞および、日本に初めて「死生学」という新しい概念を定着させたという理由で第39回菊池寛賞、1998年「死への準備教育」普及などの功績によりドイツ連邦共和国功労十字勲章などの受賞多数。現在は「東京・生と死を考える会」名誉会長、上智大学名誉教授。

——死生学とはどのような学問ですか。

死に関する学問は英語でサナトロジーと言います。直訳すると死学ですが、死について考えれば考えるほど生について考えることとなりますから、死生学と翻訳した方が本当の意味を表すのではないのでしょうか。

死生学とは、医学、看護学、教育学、哲学、心理学、宗教学、文学、法学、歴史学などあらゆる分野の立場から、人間の生と死を探求する学問であると定義していいでしょう。

——死生学を学んで、死についての考え方は変化しましたか。

私の「死」に対する考え方は3つの段階に分けられます。変化というより発展していったように思います。

第1段階は妹の死、祖父の死、戦争による友人たちの死を体験したときです。第2段階では上智大学で「死の哲学」を教えながら、ガン告知、ホスピス、死の芸術、ターミナルケア、臓器移植、自殺、死別と悲嘆、葬儀などの幅広いテーマについて勉強しました。

第3段階は、95年に私自身が悪性のガンの告知を経て手術を受けたあとです。今も多くのガン患者さんに会いますが、何も食べられず、飲めないというつらい体験があったので、患者さんにさらに共感できるようになったと思います。私は二度とガンには罹りたくないですが、経験して良かったです。

——死に対する恐怖、身近な人との死別の恐怖を取り除くにはどうしたらいいですか。

恐怖とは何かある特定の対象、例えば痛みなどが原因となって生ずるもので、恐れ

ている正体がわかっていますが、不安とは特定の対象に期することができない漠然とした気分のようなものです。

死への恐れには恐怖も不安もありますが、私はそれを9つに区別(※1)しています。終末期にある多くの患者さんは死に対して過剰な恐怖と不安を抱えていますから、それを和らげることがターミナルケアの大切なポイントですね。

グリーンエデュケーション
——若年層に対する悲嘆教育の必要性についてお話しください。

若い人は人生において必ず祖父母や父母の死、結婚した日本の女性の多くは夫の死などの死別を体験します。人生は喪失体験の連続です。

ですから、若い人のために悲嘆教育が必要です。今の学校ではいろいろな危機にどう対応するかという教育が欠けているのではないのでしょうか。

具体的な方法として私は長年、中学や高校で、年に1回は生と死を考える日を設けるように提案してきました。その日には医師、看護師、死別を体験した人を招き、話してもらおうが良いと思います。それによって若い人は、将来のもっと苦しい体験に対応する方法を学ぶのです。

——日本は長寿国ですが、毎年3万人以上が自殺し、60代以上の自殺も1万2千人以上にのぼります。長生きは良いことでしょうか。

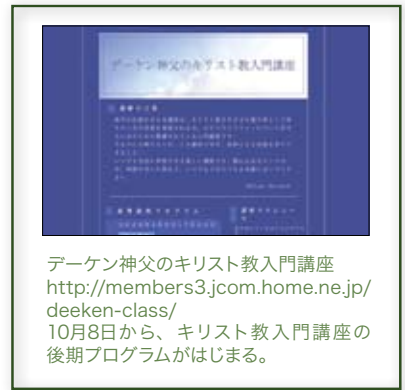
長く生きることは基本的にいいことだと思います。20世紀の医学と看護学の努力によって日本人の平均寿命が世界一になったのは非常に素晴らしいことです。日本の男性はドイツの男性より長く生きることができるようになりましたか？ だから私は日本に来ました(笑)。

しかし、ただ長く生きることだけでは足りないですね。ただ生きるのではなく、生きがいのある生き方によって長く生きることが望ましい。延命をすすめていいと思いますが、生きがいのある豊かな第三の人生(※2)を過ごすために6つの課題(※3)を提言しています。

(アルフォンス・デーケンさんには、「死」に関する強烈な体験がある。4歳の妹の死と祖父の死である)

妹が治らないとわかったとき、家族の誰かが必ずそばについていました。最期の日に妹は一人ひとりと握手して「さようなら。天国でまた会いましょう」と言って亡くなりました。死に直面しているときに冷静に再会の希望を述べたのが、とても印象深かったです。

また、祖父も父も命をかけて反ナチ運動をしていたので、連合軍が私の住む街に入った日、祖父はナチから解放されるという歓迎のしるしとして、ベッドリネンで作った白旗を掲げて家の前に立っていました。しかし、最初に入ってきた兵士に祖父は射殺されたのです。非常に苦しい体験でした。



——その際の心の動きについてお話しください。

戦争中、私は小学生でしたが、休日に反ナチのピラをタイプライターで打っていました。反ナチ活動は非常に危険でした。

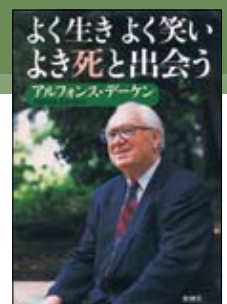
「ナチのエリート学校に推薦した」と校長先生に言われたとき、私は人生で初めて良心に従って「行かない」という決断をしました。校長先生は非常に怒り、同級生にも随分いじめられました。それ以降、新約聖書を毎日読んで夏休みに暗記していたので、私は祖父の亡骸を見ながら聖書の「汝の敵を愛せ」という言葉を思い出したのです。

兵士は極度の緊張状態で、殺すか殺されるかという状況にいたのでしょうか。ずっと連合軍を美化していたので、非常に複雑な気持ちになり、理不尽すぎる死だと感じました。しかし、11歳の私は憎しみや復讐が聖書に反する態度だと理解していました。連合軍がドイツ兵や武器を探す目的で家宅捜索を行っていたから、聖書の精神に従うならば兵士に「Welcome」と言わなければならなかったのです。



A WAY OF LIFE

Alfons Deeken



『よく生き よく笑い よき死と出会う』
アルフォンス・デーケン著
新潮社 1470円(税込)

「聖書の精神は、戦いや勝利、ドイツ人民が他の国民よりも優秀であり、ユダヤ人やロシア人に対する差別的な考えを持つといったナチのイデオロギーと正反対だと思いました。人間はみな平等である。敵であっても愛さなければならぬという、ナチと対立する思想である聖書に、とても魅力を感じました」

「祖父の死から私は、避けられる死と避けられない死を区別するようになりました。戦争、爆弾、兵士による射殺など、人間の愚かさによって相手を殺すということは避けられる死です。しかし、妹の白血病による死は、あの当時は避けられない死でした」

「西洋の多くの病院では、チャプレンと呼ばれる神父や牧師が働いていて、死後に罰があるのではないかと恐れる患者さんに対して、“神さまは裁判官ではなく、愛し許してくださる存在である。”ことを伝えて、過剰な恐怖と不安を和らげる努力をしています」

「今私は、年齢のために、死にもっと近くなったような気がします。自分のお墓もすでに決まっています。さっきあなたがたは私のお墓の前を通りましたよ。何も挨拶しなかったですね（笑）。四ツ谷駅から上智大学に来るとき、左側に聖イグナチオ教会があるでしょう？ 教会の下に納骨堂があるのですが、その中で私のお墓の場所は決まっています。入る日はまだ未定ですが、入ってからお墓に遊びに来てください（笑）」



Alfons Deeken

「来年、私は来日50年を迎え、喜寿になります。1959年来日したとき、日本では死はまだタブーでした。私は日本語学校でも日本語の先生に、日本の社会においてはできるだけ死という言葉を使わないでください、結婚式のスピーチでは絶対だめだと言われました」

——理不尽な死に対する痛みをどのように乗り越えたのでしょうか。

私は幼児洗礼を受けましたが、父から「大人になるときに自分の信仰を選ばなければならぬ」と言われていたので、祖父が射殺されたとき、「今がその決定的な瞬間だ」と感じました。祖父を殺した敵を歓迎できるのか、私の信仰が試されていました。随分苦しみながら兵士に「welcome」と言い、彼らが家宅捜索をしているときに祖父の亡骸に跪き泣き崩れました。

私はその日に大人になり、自分で信仰を選んだのです。人間は自分の人生を選択しなければならないときがあります。傍観者ではなく人生のドラマの主人公でいなくてはならないのです。

——1回限りの大切なとき、決定的な瞬間についてお話してください。

ギリシャ語では時間をクロノスとカイロスの2つの言葉で表します。クロノスは物理的な時間の流れ、年月、日、分など量的な時間を意味します。カイロスとは一度だけ来る二度と還り来ない決定的な瞬間、かけがえ

のない質的な時間を指します。

例えば、好きな人と一緒にゆっくりコーヒを飲む2時間は長く感じません。逆に、大雨の最中に傘なしで30分バスを待っている時間はものすごく長いですね。

ですから私は中年期、あるいは第三の人生において時間について考えることをおすすめします。というのは、中年期にある日突然、自分の人生が半分過ぎ去ったことに気づいて、パニックに陥る人がいます。若いときに見た夢と現実のギャップを感じるのです。

確かにクロノスの時間は短くなりますが、カイロスの時間を尊重すれば、今日という日は大切な日となります。時間を無駄にしない態度は、中年期の危機を乗り越える非常に積極的な道になりえます。

——いずれ訪れるご自身の死についてどのように考え、準備されていますか。

最近私は、死後についてもよく考えます。カトリックでは神様との出会いは死後の約束ですから、大切な人との再会の希望と喜び、天国の魅力について想います。

自分の死について考えるとき、今後、最後

まで人のために役に立つことを希望しています。講演活動をできる限り続け、あまり長く寝たがり状態を望みません。周りの人に迷惑をかけたくないのです。随分日本的な考え方になりました（笑）。

しかし、突然死、ポックリ死も理想的ではないです。私はポックリ寺にお参りするお婆ちゃんの迷惑をかけたくないという動機を立派だと思いますが、私自身はやはり死ぬ前に多くの人に感謝し、さようならを告げることを希望しています。そして、わがままにならず、ユーモアを持って生を全うしたいのです。

Text by : 藤野未央

※1 著書『死とどう向き合うか』の中で分類している。①苦痛への恐怖②孤独への恐怖③不愉快な体験への恐れ④家族や社会の負担になることへの恐れ⑤未知なるものを前にしての不安⑥人生に対する不安と結びついた死への不安⑦人生を不完全なまま終えることへの不安⑧自己消滅への不安⑨死後の審判や罰に関する不安

※2 欧米では定年退職後の人生を、「自立するまで」「社会人」に次いで、「第三の人生」として規定している。

※3 6つの課題とは①手放す心を持つ、執着を断つ②許しと和解③感謝の表明④さようならを告げること⑤遺言状の作成⑥自分の葬儀法を考え、周囲に伝えておくこと、を意味する。